

「ゲラサ人の悪霊からの解放」

2021年12月29日

イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が墓場から出て来て、イエスに会った。この人は墓場を住みかとしており、もはや誰も、鎖を用いてさえつなぎ止めておくことはできなかった。(マルコ福音書5章2節～3節)

イエスがお許しになったので、汚れた霊どもは出て、豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れは、崖を下って湖になだれ込み、湖の中で溺れ死んだ。豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。(マルコ福音書5章13節～14節 a)

そして、イエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしくなった。(マルコ福音書5章15節)

悪霊に取りつかれたゲラサ人を癒やす主イエスの奇跡は、奇妙な出来事で、とても事実起こったこととは思えない。しかし、この奇跡から、色々なことが連想され、読む者に強いメッセージを伝えている。私の想像から、受け取ったメッセージを自由に書きたい。

主イエスの一行は、湖の向こう岸のゲラサ人の地方に着いた。ゲラサは異教徒の住む地である。舟から上がられると、汚れた霊に取りつかれた人が墓場から出て来た。彼は墓場を住みかとし、足枷や鎖で繋いでも、足枷を砕き、鎖を引きちぎり、誰も彼を押さえつけることができなかった。夜昼、墓場や山で叫び続け、石で自分の体を傷つけ、体中が血だらけであった。墓場で死者や死を身近とし、自分を痛めつけ、村人に恐怖を与え、彼らは困り果てていた。彼は主イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、「いと高き神の子イエス、構わないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい」と大声で叫んだ。主イエスが「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたので、苦しみ悶えたのである。悪霊に取りつかれた者は、神から遠いゆえに、誰も気づかない時に、主イエスを神の子と見抜き、恐れるのである。主イエスが「名は何と言うのか」と尋ねると、「名はレギオン。我々は大量だから」と答えた。そして、この地から追い出さないように懇願した。ゲラサには豚の大群が飼われていた。汚れた霊どもは、「豚の中に送り込み、乗り移らせてくれ」と願った。「イエスがお許しになったので、汚れた霊どもは出て、豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れは、崖を下って湖になだれ込み、湖の中で溺れ死んだ。」レギオンの霊が豚の中に入ると、二千匹もの豚の大軍は暴走し、湖になだれ込み、溺死した。おどろおどろしい出来事である。この出来事のキーワードは「レギオン」である。レギオンは、ローマの六千人からなる重武装軍団である。レギオンは、軍隊であるから戦場で自らも傷つきながら、行進し、行く道には屍が累々と重なる、全ての人から恐れられた軍団である。



ローマの軍団

この人は、レギオンを目の前で見て、家族や友人たちが虐殺され、恐怖のあまりレギオンの霊に取りつかれたのではないか。その恐怖が彼の心から離れず、レギオンそのものになって、死と同居し、自分自身を傷つけ、周りに恐怖を与え、誰も抑えつけられない状態になった。このレギオンが豚の中に入ると、暴走し、自ら溺死していった。軍隊は相手を死に至らせ、自分も死へと驀進する。豚の暴走は軍隊の実態を象徴している。

日本の軍隊は、日清、日露戦争に勝利し、拡大の一途を辿った。朝鮮、中国、アジア諸

国を占領支配し、それらの国々に多大な犠牲を強いてきた。軍部が政治の中枢を担う形態になり、歯止めが利かなくなっていく。国力が桁外れに違う米国と戦争を起こし、初めは攻勢であったが、次第に敗北する形勢になった。戦争末期、神風特攻隊や人間魚雷回天など、生還することができない、自らの死をもって攻撃する戦闘に頼るしかなかった。軍隊は、他者を死に至らしめるが、自らも死に向かって驀進する狂気を持っている。二千匹の豚の大軍の暴走と溺死は、軍隊のあり方を浮き彫りに描いている。歴史は、軍隊の暴走を知り、文民統制（シビリアンコントロール）の英知を得たのである。

福音書は、主イエスが悪霊につかれた人を癒やす奇跡をしばしば記しているが、それは、言葉をもっての癒やしである。ゲラサの人の場合は、豚二千匹を犠牲にしての癒やしという特異な出来事として記している。この犠牲が、次の問題を引き起こしている。

レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、豚飼いたちは恐ろしくなった。人々に恐怖を与えていた彼が悪霊から解放され正気にはなったが、そのために豚が二千匹も失われたことを彼らは人々に語り聞かせた。すると、人々は主イエスに、この地から出て行ってもらいたいと願い始めた。イスラエル人は、豚は汚れた動物として、食べることはもちろん、飼うこともしない。異教徒のゲラサ人は、経済効率のよい豚を飼って利益を得ていた。墓場で叫び、村人の恐怖であった彼が正気に戻ったことは喜ぶべきことではあるが、経済的な損失が再び起こることには耐えられないと、主イエスに立ち退きを要求したのである。彼らの要求を理解することはできる。



豚の群れ

この奇跡から、下記のように理解することはできないであろうか。レギオンは恐怖の軍隊を象徴し、豚は経済効率を象徴している。主イエスは軍隊の恐怖から解放するために、経済効率の豊かさを約束する二千匹の豚を犠牲にした。そのような犠牲を払って、一人の人間に救いを与えられた。どのような犠牲を払っても、失われた人を求め、人間に回復させる、主イエスの確かな愛が現わされている。しかし人々は、これを受け入れずに拒んだ。

このように受け止める時、ゲラサ人の悪霊からの解放は、現代に突きつけたメッセージとして聞くことができる。今日の世界は、強大な軍事力と強力な経済力を頼み、これらを手にすることによって安心が得られると、必死で求め続けている。ところが、その実態は、軍事力の亡霊と経済力の亡霊の狭間で、人間の尊厳が著しく失われている。武器によって命が奪われている過酷な現実があり、グローバル化した市場経済は、貧富の格差を生み出し、生きる術を失った大勢の人々を作り出した。主イエスは狂暴なレギオンを葬り去り、豊かさをもたらす豚を捨てても、一人の人を救う奇跡を示された。ここに、福音の啓示を見、これに倣う所にキリストの教会が建つ。このように理解することはできないであろうか。主イエスを拒んだゲラサ人のようであってはならないと受け止めたいと思う。

悪霊から解放され正気になった彼は、舟に乗って、この地を去ろうとする主イエスに、お供したいと願い出た。主イエスは「自分の家族のもとに帰って、主があなたにくださったことを、また、あなたを憐れんでくださったことを、ことごとく知らせない」と言われた。彼は異教のデカポリス地方で、主イエスの憐れみを受けたことを言い広め始めた。